様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００３１２

研究課題名（和文）近世期の芝居茶屋の研究

研究課題名（英文）Early Modern Japanese Theatre Teahouses - Research and Discourse

研究代表者
ＢＪＯＥＲＫ　ＴＯＶＥ（BJOERK, TOVE）

埼玉大学・人文社会科学研究科・教授

研究者番号：９０７４７９７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、歌舞伎役者や歌舞伎の常連客の日記を通して、近世期の芝居茶屋が歌舞伎劇場の運営や歌舞伎役者とパトロンとなる客の関係が成立するために不可欠存在だったことを具体的に検証し、芝居茶屋の営業戦略の実態や、特に芝居茶屋の女性のその中の役割を示した。これは、今までの歌舞伎研究であった男性中心の考え方に歌舞伎劇場をまつわる商業圏の働き方を理解するための新たな視点を与えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近世期の芝居茶屋に焦点を当たることによって、歌舞伎にまつわる商業圏が当時の社会の社会階級を超える機能を持っていたことを示すことで、近世期における誰でも自由に参加できる文化的空間、いわゆる公共圏が成立した可能性を指摘した。これは近世期の歌舞伎の社会的な重要さを示すだけではなく、現在、芸能の社会的重要さを考えさせる材料としても役に立つだろう。

研究成果の概要（英文）：This research scrutinizes role of the early modern theatre teahouses, their relation to the Kabuki theatres, actors and spectators through the lens of diaries written by early modern kabuki actors and spectators. These first hand witnesses proves the pivotal role the teahouses played in spreading information, maintaining relationships to wealthy patrons, and managing the contacts between these patrons and lead actors with solid and concrete facts. Within this, the central role of the women of the teahouses became clear, and forms a totally new basis for understanding the working of the business network surrounding the early modern Kabuki theatres.

研究分野：近世文学

キーワード：歌舞伎　芝居茶屋　環境論　観客論　商業圏　公共圏　日記研究　芸態論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近世期の芝居茶屋研究の背景として、守屋毅氏が指摘した、舞台の上で行う芸能を見つめる芸態論とその舞台を可能とする劇場の環境を見つめる芸態論の側面がある（『近世芸能興行史の研究』弘文堂、1985 年）。守屋氏が、この両面は近世期の歌舞伎の社会的役目を理解するために不可欠とするが、これまでの歌舞伎研究は芸態論を重視し、環境論は手薄くなっていた。そこで、本研究の準備として歌舞伎興行の江戸歌舞伎が大きく進展した享保期（1716～1736 年）は残された資料が少なかったが、手つかずの資料歌舞伎役者二代目市川團十郎の日記を分析し、享保期江戸歌舞伎について研究を進めていた。歌舞伎役者および江戸歌舞伎劇場についてはすでに研究成果をまとめ発表したが、歌舞伎劇場とともに商業圏を形成していた茶屋については、これまでに詳しい分析が行われていなかった。

２．研究の目的

本研究の目的は、近世期の日記を通して、芝居茶屋と歌舞伎劇場の所有者（座元）、歌舞伎役者やパトロンとなる観客との関係を明らかにすることである。歌舞伎役者二代目市川團十郎および初代中村仲蔵の日記、また足繁く江戸歌舞伎劇場に通い詰めた大和国郡山藩二代目藩主・柳沢信鴻の日録などを分析することで、観客と江戸歌舞伎劇場、その周辺で営業していた芝居茶屋の三者の関係性、またそこに形成される商業圏の成り立ちについて明らかにする。こうした研究を通じて、近世期における歌舞伎界の社会的役割が解明される。

また、歌舞伎とともに発展してきた人形浄瑠璃（文楽）との比較研究を通じて役者の出演料について明確にし、また歌舞伎の舞台には登場しない女性らが芝居茶屋を通して歌舞伎興行においてどのような役割を果たしたかなどの分析も加えて、江戸歌舞伎劇場を取り巻く当時の環境について詳細に考察する。

さらにドイツの哲学者ユールゲン・ハーバーマスは、社会階級を問わず誰もが参加できるおおやけの空間としての「公共圏」（Strukturwandel der Öffentlichkeit, Neuwied / Berlin, 1962 年）を提示し、欧米の演劇研究や社会学に影響を及ぼした。そこで大きい目標を立てると、江戸歌舞伎劇場にまつわる、芝居茶屋を含む環境の公共圏としての役割を評価することによって、歌舞伎を欧米演劇論の文脈のなかで捉えることが可能となるだろう。

３．研究の方法

二代目市川團十郎の日記（写本五種）、松平大和守直矩著『松平大和守日記』、著者不明『千種日記』、柳沢信鴻著『宴遊日記』『宴遊日記別録』などを元に、歌舞伎劇場を中心とする商業圏の成り立ち、江戸歌舞伎劇場と芝居茶屋の関係、また芝居茶屋と観客との関係についての記録を収集し、芝居茶屋と歌舞伎劇場、歌舞伎役者、観客の関係の観点から分析し、成果を発表した。

そして、近世期の歌舞伎の環境に深く関わる歌舞伎役者の出演料の問題に新たな視点を加えるために、弘前藩日誌録『弘前藩家譜』、浜之市（現・大分市）役人記録『府内藩記録』などを元に、歌舞伎と人形浄瑠璃それぞれについて、大名屋敷での出演料と劇場での出演料と比較分析した。

さらに、柳沢信鴻著『宴遊日記』の記録をもとに、芝居茶屋の関係者、特に芝居茶屋の女性は大名屋敷にどのような情報や季節の贈り物を持って行ったか、また屋敷での歌舞伎公

演の際にどのような役目を果たしたのかを分析した。この研究の延長線として、柳沢信鴻の日記にも頻出した初代中村仲蔵の日記『雪月花寝物語』『鶴秀日記』自伝『月雪花寝物語』などを元に、劇場と大名屋敷での歌舞伎興行における女性の役割について分析した。

４．研究成果

2018 年では、1 芝居茶屋の来歴と進展、2 歌舞伎劇場と芝居茶屋の関係、3 歌舞伎劇場における客層の変化と芝居茶屋の宣伝戦略、4 歌舞 伎劇場の宣伝戦略の 4 点を明確にするため、二代目市川團十郎日記諸本および『松平大和守日記』『千種日記』『宴遊日記別 録』の調査し、芝居茶屋は中世期、盆踊りやややこ踊りを演じた芸人と京都の茶売りが協働したことから始まり、やがて元禄期に 組織化していったこと、芝居茶屋は身分の高い観客をターゲットとしていたことを示すことができた。これらの一部は拙書『二代目市川團十郎の日記にみる享保 期江戸歌舞伎』(文学通信、2019 年 2 月;学術図書 18HP5035)第 7 章「享保期の芝居茶屋」および第 8 章「江戸歌舞伎の観客」に提示した。

2019 年では、『月雪花寝物語』をもとに芝居茶屋と仕出屋の関係を明確にし、歌舞伎劇場を中心とする「商業圏」形成を元に、近世期歌 舞伎劇場の「公共圏」としての機能について解明し、これまでの成果を国内外の学会や座談会で発表した。これらの日記には芝居茶屋と大名屋敷の親密な関係が現れたので、これらの記述をもとに芝居茶屋の営業戦略を分析した。

2020 年度は二代目團十郎の日記調査を続け、連載中二代目團十郎の日記諸本の注釈解説シリーズの第四回を連載した（「二代目市川団十郎日記詳解第四回―享保十九年四月三日~五月五日」、掲載誌名『埼玉大学紀要(教養学部)』(第 56 巻(第 1 号)、125~ 139 頁)2020 年 9 月)。さらに、芝居茶屋を現場とする正徳 4(1714)年に起きた江戸城の女中と歌舞伎役者の密通事件を芝居茶屋の観点から英語で発表した(章著書 The Ejima-Ikushima Scandal in “Theatre Scandals”, Leiden: Brill Publishing House (2020), pp121-145)。 また、近世期の芸能の興行環境を知るために、歌舞伎役者と人形浄瑠璃の演者の大名屋敷の出演料を調査し、旅芝居から得た出演料と比較し、劇場で行わない興業の 場合、人形浄瑠璃の演者は歌舞伎役者より高い出演料を得たという新な発見をし、論文として発表した(論文名「江戸中期の歌舞伎役者と人形浄瑠璃演者の出演 料」掲載著書『書くこと・書かれたものー 表現行為と表現―』(埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書 12, 37~ 48)2021 年 3 月)。

2021 年度は「二代目市川團十郎の日記詳解―第五回」二代目市川團十郎の享保 19(1734)年 5 月 5 日から 10 日の日記記録に注釈と解説を付け、紀要「埼玉大学教養学部」57(2)に載せた。本記録から、市村座と葺屋町の芝居茶屋の日常的運営を読み解くことは可能と判断した。そして、研究発表「芝居茶屋の営業戦略―柳沢信鴻と松屋・永楽屋・猿屋ら江戸の芝居茶屋」2021 年 12 月 11 日、歌舞伎学会で大和 郡から山半藩主柳沢信鴻の日記『宴遊日記』の安永 2(1773)年から安永(1775)年の記録から、堺町の芝居茶屋松屋、同町の水茶屋永楽屋と木挽町の芝居 茶屋猿屋の関係者は定期的に信鴻の屋敷を訪れ、興行や役者の宣伝をし、季節の挨拶や大名屋敷での歌舞伎公演の際に役に立つ人材に派遣に携わっていたことを 明らかにした。さらに座談会「歌舞伎役者と観客の日記から SNS」参加:歌舞伎学会主催座談会で二代目市川團十郎と柳沢信鴻の日記から読み解ける情報は、歌舞伎 の歴史観のための意味について他研究者 5 人と議論した。

2022 年度、江戸の芝居茶屋の営業戦略を探るために、大和郡山藩藩主柳沢信鴻の日常が記

された日記「宴遊日記」の安永期の記録を中心に分析し、「安永期江戸 の芝居茶屋と水茶屋ー柳沢信鴻の日記から」(掲載誌名『歌舞伎ー研究と批評』67 号)、および研究発表 Performing Privately: The Women of the Theatre Teahouses and Kabuki at Domain Estates (International Federation for Theatre Research, University of Iceland (2022))として発表した。さら に、本研究の延長線として見えてきた芝居茶屋の女性の営業のための重要な役割を探り、初代中村仲蔵の日記「雪月花寝物語」や「鶴秀日記」などを元に、芝居 茶屋の女性と屋敷での歌舞伎踊りなどの稽古事を担当していたお狂言師の業績を探り、「歌舞伎と女ー初代中村仲蔵の母おしゅんの業績」(埼玉県立近代美術館 と埼玉大学共催企画「ミュージアム・カレッジにて講演 2022 年 12 月 3 日、埼玉県立近代美術館)として発表した。

総合的に、近世期の芝居茶屋が関わっていた商 業圏は芝居町から大名屋敷まで及んでいたこと、またこの商業圏は身分を超えた文芸圏を支えていたことがわかった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Bjoerk Tove Johanna	４．巻 57（２）
２．論文標題 二代目市川團十郎の日記詳解ー第五回目	５．発行年 2021年
３．雑誌名 埼玉大学教養学部	６．最初と最後の頁 199-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Bjoerk Tove Johanna	４．巻 14
２．論文標題 研究論文「『信竹取物語』ー観客の自由と演者の選択における共創の可能性」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 リベラル・アーツ叢書	６．最初と最後の頁 49-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 ビュールク・トーヴェ	４．巻 ５６（１）
２．論文標題 二代目市川団十郎日記詳解第四回ー享保十九年四月三日～五月五日	５．発行年 2020年
３．雑誌名 埼玉大学紀要	６．最初と最後の頁 125～139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Bjoerk Tove Johanna	４．巻 51
２．論文標題 Profits and Puppet Theatre: Economics Beyond the Permanent Stages	５．発行年 2019年
３．雑誌名 The Journal of the Oriental Society of Australia	６．最初と最後の頁 142-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Bjoerk Tove Johanna	4．巻 53
2．論文標題 Reading and Acting in Early Modern Kabuki: Browsing the Library of Ichikawa Danjuro II	5．発行年 2022年
3．雑誌名 The Journal of the Society for Asian Humanities	6．最初と最後の頁 231-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 ビュールク・トーヴェ	4．巻 67
2．論文標題 安永期江戸の芝居茶屋と水茶屋―柳沢信鴻の日記から	5．発行年 2022年
3．雑誌名 歌舞伎―研究と批評	6．最初と最後の頁 51-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　4件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 ビュールク・トーヴェ　ヨハンナ
2．発表標題 芝居茶屋の営業戦略ー柳沢信鴻と松屋・永楽屋・猿屋ら江戸の芝居茶屋
3．学会等名 歌舞伎学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 Tove Bjoerk
2．発表標題 The Art of Making Money: the Strategies of Early Modern Theatre Teahouses
3．学会等名 International Federation for Theatre Research（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Tove Bjoerk
２．発表標題 Breaking Through Barriers: Guan Yu on the Early Modern Kabuki Stage
３．学会等名 Asian Studies Conference of Japan（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tove Bjoerk
２．発表標題 公共圏としての江戸時代の歌舞伎劇場
３．学会等名 東京国際芸術祭（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tove Bjoerk
２．発表標題 江戸中期歌舞伎関係者らの日記ー日記が解き明かす江戸芝居茶屋の実態ー
３．学会等名 日記研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tove Bjoerk
２．発表標題 Parables and Illusions: The “Song of Everlasting Sorrow” on the Japanese Stage
３．学会等名 Australian Association for Asian Studies（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Tove Bjoerk
２．発表標題 When the Gods come to Town: Enacting Rural Deities on the Early Modern Kabuki Stage
３．学会等名 International Federation for Theatre Research（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Tove Bjoerk
２．発表標題 Performing Privately: The Women of the Theatre Teahouses and Kabuki at Domain Estates
３．学会等名 International Federation for Theatre Research（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 ビュールク・トーヴェ
２．発表標題 江戸中期歌舞伎関係者らの日記―日記が解き明かす江戸芝居茶屋の実態―
３．学会等名 日記研究会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 ビュールク・トーヴェ
２．発表標題 歌舞伎と女―初代中村仲蔵の母おしゅんの業績
３．学会等名 埼玉県立近代美術館と埼玉大学共催企画「ミュージアム・カレッジ2022「トランジット―新たな敷居学の提案」（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計3件

1．著者名 編者：山崎敬一、ビュールク・トーヴェ、陳海茵・陳怡禎	4．発行年 2021年
2．出版社 Saitama University Faculty of Humanities and Social Sciences	5．総ページ数 308
3．書名 観客と共創する芸術II	

1．著者名 ビュールク・トーヴェ	4．発行年 2020年
2．出版社 埼玉大学教養学部・大学院人文社会科学研究科	5．総ページ数 11
3．書名 「江戸中期の歌舞伎役者と人形浄瑠璃演者の出演料」掲載著書『書くこと・書かれたものー 表現行為と表現ー』埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書	

1．著者名 Tove Bjoerk	4．発行年 2020年
2．出版社 Leiden:Brill	5．総ページ数 24
3．書名 The Ejima-Ikushima Scandal in“Theatre Scandals”,	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関